論点整理表（火振川水系）

平成27年度第3回
静岡県河川審議会
山・火振－資料－5

流域及び河川の現状

流域の概要

- 火振川は、静岡県伊豆市西部に位置する流域面積約0.9km²、流路延長約0.5kmの二級河川である。
- 火振川は、その源を伊豆市土肥町に発して西に流下し、北上に流れて、駿河湾に注いでいる。
- 流域の地形は、大部分が山地となっており、下流のわずかな範囲に沖積低地が形成されている。
- 流域の地質は、大半が海底火山の噴火によってできた湯ヶ島層群に覆われており、下流のわずかな低地に砂礫層や泥砂礫互層といった未固結堆積物が分布している。
- 火振川の河床勾配は、平均で1/16程度と急峻となっている。また、全川にわたり掘込河道となっている。
- 流域の気候は、静岡県の大部分の地域と同様に温暖で、夏季は高温多湿、冬季は温暖少雨の表日本式気候（太平洋型気候区）に属している。年平均気温は約16.2℃（松崎観測所）と年間を通じて温暖な気候であり、平均年間降雨量については約1,750mm（土肥観測所）で全国平均と同程度である。
- 流域の土地利用は、大半が山林で占め、下流のわずかな低地に宅地が占めている。
- 流域が位置する伊豆市土肥地区の人口は世帯数とともに年々減少傾向であり、老年人口の割合は増加傾向である。
- 伊豆市土肥町の就業人口の75%が第３次産業に従事しており、第３次従事者のうち「飲食業・宿泊業」が最も盛んに行なわれている。
- 土肥温泉や土肥金山、土肥海水浴場等、歴史や自然を活かした観光資源が多く立地している。
- 火振川の河口付近で土肥地区と天城湯ヶ島地区を結ぶ主要幹線道路の国道136号が横断している。天城湯ヶ島地区で整備中の伊豆縦貫自動車道が開通すれば、各地からの土肥へのアクセス向上が期待される。
- 平成25年4月、清水港と土肥港を結ぶ海上の県道223(ふじさん)号が認定され、静岡県の新たな観光資源として、交流人口の拡大に大きな期待がかかっている。
- 火振川西岸では、古墳時代の遺跡が発見されている。

治水事業の沿革と現状

- 昭和36年（1961年）の６月23～28日にかけての集中豪雨では、土肥地区で、死者・行方不明５人、全壊家屋24戸、流出家屋15戸、床上浸水482戸、床下浸水595戸の被害が発生した。火振川からの溢流が災害史に記載されている。
- 上流域の砂防事業や治山事業による整備により、昭和36年以降、大きな災害は発生していない。
- 1854年の安政東海地震では、大きな津波被害が発生し、土肥地区では、浸水56件、流出２件、死者13人の被害が発生した。
- 河口右岸の屋形海岸では、景観への懸念より第3次地震地震被害想定に基づく津波対策が実施されていない。

河川の水利用

- 火振川水系に係る水利権はない。
- 漁業権は設定されていない。
- 水量が少ない。
- 火振川の右岸沿いにキャンプ場がある。

河川環境及び住民との関わり

- 水質について環境基準の類型指定はされていない。
- 公共下水道が整備済みである。
- 河畔林が多く分布しているが、三面張区間が多くを占めている。
- 河川に近付きにくく、親水性に乏しい。

水系の特徴（着眼点）

治水

- 火山由来の地質が多く分布しており、土砂生産の活発な流域である。
- 下流のわずかな低地に市街地が広がっている。
- 過去の大きな洪水では、多量の土砂により壊滅的な被害を受けた。近年は上流の砂防事業の整備等により大きな被害を受けていない。
- 安政東海地震では大きな津波被害を受けている。
- 河口付近には、旅館や海水浴場等あり、津波対策においては、施設整備の際景観との両立が重要となる。

利水

- 火振川に係る水利権はない。

環境

- 流域内の下水道整備は完了している。
- 三面張りとなっており、生物の生息環境として好ましくない。
- 河川に近付きにくい。